太棹

加藤虎之助 しげを画

第九拾參號

東京 太棹社 發行

胃腸に ミラカチ

東京市日本橋區通二ノ五
新潮製藥株式會社
電話日本橋三八一二番
振替東京七〇一〇八番

關西料理

すつぽん椀なら江戸前蒲燒なら
御宴會は大勉強すべて安値に
円六
九段下 俎橋
電話九段四〇〇六番
女中は皆藝人揃ひ・太棹の彈き手も揃へて皆様をお待ち致して居ります。
——円六獨特のサービス——

風流・金ぷら・茶漬
【美地句】
太田屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

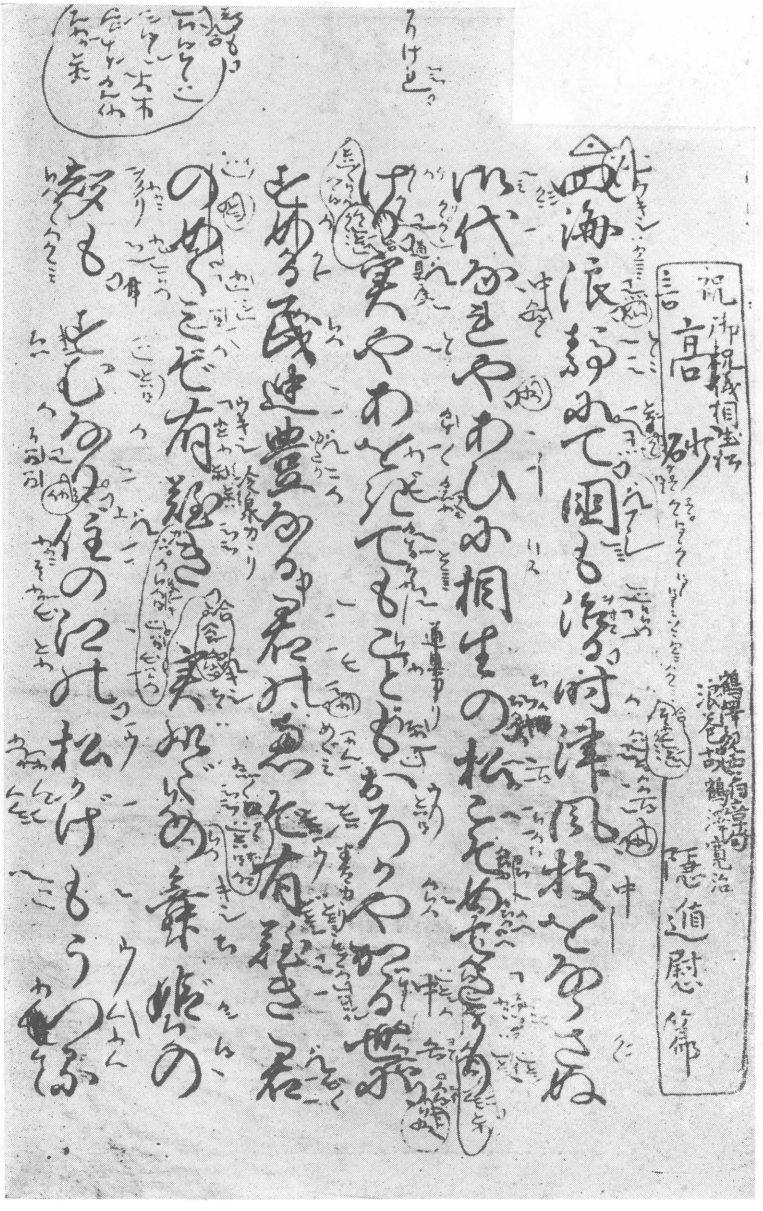
梅本香伯氏二世鶴澤觀西翁襲名記念

前列向て右より＝鶴澤寛治郎・竹本文字太夫・鶴澤友治郎・二世鶴澤觀西翁・竹本津太夫・竹本叶太夫の諸氏

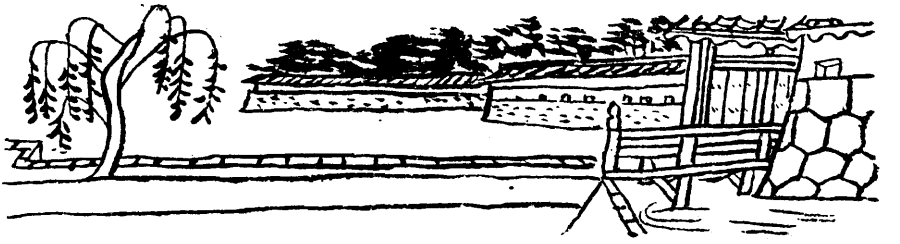
後列向て右より＝近江清華・鈴木松寶・栗原千鶴の諸氏

（大阪新町かつみ旅館にて）

砂高の附節翁西觀代初



（藏所師郎治寛澤鶴代二）本寫七清澤鶴代初



太　棹　等九拾參號目次

二代目鶴澤觀西翁襲名經過に就て

香伯會　栗原千鶴　鈴木松實　近江清華

鶴澤觀西翁略歷……（四）
觀西翁襲名に就て美談佳話集……（六）

文樂樂屋圖譜……宮尾しげを……（七）
ラヂオ淨曲漫評……金王丸……（八）
わが隨感錄……近江清華……（一〇）
素義風流線……芳河士老……（一三）
音曲昔噺……鐵……（一四）
新春いろは問答……森三好……（一四）
つばめなき後の新義座……芳河士……（一六）
岡田蝶花形氏へ……（一七）
太棹社彙報……（一八）
各席語物帳より……（二三）

野澤金造を憶ふ……齋藤拳三……（二六）
思ひ出話……田中煙亭・高瀬操……（三一）

當座帳・其他……（三三）
表紙・カット……宮尾しげを
寫眞……梅本香伯氏二代目觀西翁襲名記念・鶴澤觀西翁朱入「高砂」
編輯後記……芳河士記

二代目鶴澤觀西翁

襲名經過に就て

香伯會　栗原千鶴
鈴木松寶
近江清華

昨年末帝都因會總會に於て、梅本香伯師が出席會員總投票の結果、最高點にて會長に就任、從來の素人名にてはとの議起り、委員多數の方々より太夫名をとの御懇望に、過ぎし昔竹本若太夫を名乘り居りし事ありし爲め、此の竹本若太夫を名乘るべく大阪因會へその由承諾ありたき旨、香伯師より通知されたる處、因會の一部委員から、個人として豊竹若太夫襲名の推薦がありました。然る處、右豊竹若太夫名跡を襲名せんとする事に就き、奇怪にも東京の淨瑠璃時報紙上に感情にのみ走りしか、又は他意ありしか、常識にては了解に苦しむ反駁文が掲載されましたので、出來得べくんば玄人間の問題に素義の立ち入らざるやう考へしも、それにしても、豊竹若太夫襲名に就き、間違ひのあらざるやう、大阪因會その他の眞意を訊さん爲め、私共三人は下阪したのであります。

右は淨瑠璃時報社主藤田氏が、七十五歳もの先輩香伯老を相手に取り、餘りにも新年早々義太夫界を騒がしてゐる事を見るに忍びず、茲に三人打揃つて、多忙の中ではありましたが下阪したのでありました。これは別に香伯師に頼まれた事でもなく、我々三人の自發的行爲である事を申添えます。又斯うした事は頼まれて出來るものではない事當然であります。

扨て下阪して早速、津太夫、友次郎、叶太夫、文字太夫、大隅太夫、南部太夫、勝平、寛治郎の諸氏(順不同)に面會、以上の諸氏は豊竹若太夫襲名に就き當方より懇談の結果、贊意を示されたのであります。

尚、茲に一寸申上げたきは、右襲名は例へば無斷にその名跡を名乘つても、さのみ問題はないとの事で、現に東京の某

々太夫、某太夫兩師等も相當權威ある名跡であるに拘らず、大阪因會へは無斷の襲名との事で、若太夫問題はこの不文律の、言はゞ法則に據つて、大阪因會へ叮嚀に話を申込んだ事により、反つて不快なる問題が起つたといふべきでありまし。(但し相當權威ある名跡を無届襲名の場合は、大阪因會へは入會を絶し、例へば大阪表にて某太夫、某々太夫の名儀にては因會とて興行を許さず)我々香伯會の三人はこの問題を如何にして隱便に納めやうか、この一事にのみ考へを及ぼして、表面に立たず、裏へ裏へと廻つてこの一事の正しい結果をのみ願つてゐたものであります。

右の通り、豊竹若太夫襲名に就ては、前記の人々にも承認され、此の名跡を名乘り得るのであります。が、茲に鶴澤友次郎師が發案にて、津太夫、叶太夫兩氏と協議せられ實に見事な結構な腹案を我々の前へ提示されたのでありました。

即ち香伯師は由來三味線の出身者でありまして、太夫名を襲ふよりは、寧ろ當然三味線の方の名跡を襲ぐべきであるとして、友次郎師は二代目鶴澤觀西翁の藝名を推められたのであります。この名跡は香伯師の師匠筋の最高の名で、初代鶴澤寛治師晩年の名跡で、加ふるに同師は淨瑠璃の三味線の朱入れを、いろは四十八文字にたとへて編み出された名手で、その作曲には有名な『高砂相生の松』其他があり、誠に權威ある名跡である由を申され、これを香伯師に推薦されたのであります。

依つて茲に相談一轉、若太夫名跡より觀西翁名跡に變り、早速東京の香伯師に下阪を求めて、此由を傳へたる處、これ亦我々三人に全部委せる旨申述べられ、且つ鶴澤寛治家御一門の非常に滿足せる御同意に依つて、茲に梅本香伯師は二代目鶴澤觀西翁の名跡を襲名さるゝ事になつたのであります。尙、東京に寛三郎師がをられるので、一應意見を訊したる處是亦大贊成にて、百方芽出度圓滿に二世觀西翁襲名は出來上りました。

そこで津太夫、友次郎、叶太夫師等の發起に依つて、直ちに同席の津太夫、友次郎、叶太夫三師及び我等三人、これに二世觀西翁其他數人の方々にて、手打ちを行ひ、二世觀西翁に祝意を表し、同時にこれを永く記念する爲め、また今後一切この問題に就きいざこざ無き事を證さん爲めに、友次郎師の御指圖に從ひ、記念撮影を行つたのであります。

我々と致しましては、今回の問題に就き香伯師を我々の師匠としてゐるなどゝ云ふ事を一切ぬいて、公平なる素義の立場から、新年早々血で血を洗ふが如き問題を惹起せし淨瑠璃時報社に對し、言ひたい事は山積してをりますが、二世觀西翁襲名が、以上の如く堂々と芽出度行はれました事に依つて此際一切觸れぬ事を一言申添えて、淨瑠璃時報社の善處を望み、廣く義太夫に關心を持たれる諸彦に、以上の拙文を以て二代目鶴澤觀西翁襲名の經過に就て御報告申上げる次第で御座います。

昭和十三年二月吉日

初代鶴澤寛治略歴

―晩年の觀西翁―

三二改め初代鶴澤友治郎門人にて（西區立賣堀楢橋住居本名龜次郎）寛延三年八月七日和田合戰女舞鶴（二度上演）豊竹座へ鶴澤龜次郎にて始めて出場。

寶歴二年十二月七日倭假名在原系圖豊竹座出勤。

同七月廿八日雄結勘助島豊竹座へ出勤。

同十月苅萱桑門築柴轢豊竹座出勤。

同四年二月廿一日相馬太郎孝文談豊竹座出勤。

同七月廿九日義經腰越狀豊竹座出勤。

同十二月十五日天智天皇苅穂庵豊竹座出勤

同五年四月廿一日三國小女郎曙櫻豊竹座出勤。

同七月七日双扇長柄松豊竹座出勤。

同十一月一日後三年奥州軍記豊竹座出勤。

同六年三月十八日義仲勳功記豊竹座出勤。

同十一月一日甲斐源氏櫻軍記豊竹座出勤。

同七年三月廿日前九年奥州合戰豊竹座出勤

同八月十五日清和源氏十五段（三度目上演）此時豊竹筑前少掾一世一代山伏摘待の段出語ツキ豊竹鐘太夫ツレ豊竹此太夫、三絃鶴澤亀次郎にて出勤。

同十二月五日祇園祭禮信功記豊竹座出勤。三絃筆頭鶴澤重次郎、筆止鶴澤千左衛門、鶴澤龜次郎筆上二枚目となる。此興行大當りにて三年越となる。

同九年十二月七日先陣浮洲巖豊竹座出勤。（三絃筆頭鶴澤重次郎、筆止鶴澤龜次郎）

同十年三月十一日櫻姫賢姫櫻豊竹座出勤。

同八月十五日攝津長柄人柱（二度目上演）豊竹座出勤。（此時龜次郎改め寛治となる。筆止位置なり、筆頭鶴澤重次郎）

同十年十二月十一日祇園女御九重錦。豊竹座出勤。

同十一年三月十一日曾根崎新地豊竹座出勤（二月十四日道頓堀豊竹座類燒す依て曾根崎新地に來る）（前）一ノ谷嫩軍記（切）八重霞浪花濱荻（かしく十三回忌）

同十二年二月廿四日三好長慶碁軍談。豊竹座出勤。

同十三年十二月八日番場忠太紅梅箙豊竹座出勤。

明和元年四月十日官軍一統志豊竹座出勤。

明和元年十二月十五日いろは歌義臣鑒豊竹座出勤。

明和二年三月十六日敷島操軍記豊竹座出勤

同七月廿五日内助手柄淵豊竹座出勤。

同三年正月十四日本朝廿四孝竹本座出勤。（三絃筆頭初代鶴澤文藏筆止鶴澤寛治）

同七月十八日小夜中山鐘由來竹本座出勤。

同十月十六日太平記忠臣講釋竹本座出勤。

同四年五月六日天王寺雅木像竹本座出勤。

同六月十二日夏祭浪花鑑（二度目上演）竹本座出勤。

同八月四日（前）花軍壽永春（切）關取千兩幟竹本座出勤。

同十二月十四日三日太平記竹本座出勤。

同五年六月一日傾城阿波鳴門竹本座出勤。（此時皆太夫にて役場は第六ノ奥掛合）（竹本倉太夫、竹本綱太夫、竹本君太夫三絃寛治、第七道行竹本筆太夫、竹本尾上太夫、竹本倉

太夫三絃寛治、第八奥竹本島太夫三絃寛治）

同六年八月一日殿造千丈嶽豊竹萬三座出勤（三絃筆頭寛治、筆止初代鶴澤文吾）

同七年九月十九日源平鵜鳥豊竹此吉座本出勤。（筆頭筆止別箱鶴澤重次郎）

安永二年四月六日伊達娘懇緋鹿子豊竹此吉座本出勤。（三絃筆頭寛治筆止二代目鶴澤三二）

同三年八月十三日花禮會稽褐布染豊竹此吉座本出勤。

同四年正月廿九日軍術出口柳豊竹此吉座本出勤。

同六年三月廿六日伊賀越乘掛合羽堀江市の側芝居豊竹此吉座本出勤。（三絃筆頭寛治、筆止鶴澤名八）

安永七年八月十六日讃州屏風浦同座出勤。（三絃筆頭寛治筆止鶴澤三二）

天明元年九月廿三日合調四十七文字同座出勤。

同十一月三十日座本豊竹此吉市の側芝居にて（前）淨瑠璃式三番叟翁豊竹梶太夫二代目鶴澤龜次郎。千歳豊竹房太夫鶴澤吉次、三番叟豊竹此太夫鶴澤寛治（中）菅原傳授手習鑑（切）碁太平記白石噺（三絃筆頭寛治筆止鶴澤龜次郎筆上二枚目鶴澤吉次）

同二年九月廿六日吾妻海道茶屋娘北堀江座出勤。

同三年四月六日同（前）芦屋道滿大門鑑（中）双蝶々曲輪日記（切）碁太平記白石噺（三絃筆頭寛治筆止鶴澤東五郎）

同四年三月三日市の側豊竹此吉座本出勤。（前）三莊太夫五人娘（中）義經千本櫻四の切豊竹時太夫（三絃鶴澤寛治）（次）傾城阿波鳴門（切）女舞飯楓葉（三絃筆頭鶴澤文藏筆止寛治）

同七年九月廿六日道頓堀東芝居にて廓景風雪の茶會（三絃筆頭筆止初代鶴澤清七）

同十二月廿三日韓和聞書帳同座にて（三絃筆頭寛治筆止清七筆下別箱に江戸三二事鶴澤蟻鳳）

寛政元年二月廿一日道頓堀大西芝居豊竹此吉座本にて木下狹間合戰。（三絃筆頭寛治筆止竹澤鶴佐和）

同七月十九日兒淵東軍記同座出勤。（三絃筆頭寛治筆止蟻鳳）

同八月十五日有職鎌倉山北堀江市の側芝居豊竹此母座本出勤。（筆頭清七筆止鶴澤時藏中軸にてスケと入れ鶴澤寛治）

同九月八日天王山杜鵑合戰道頓堀東芝居座本豊竹此吉にて（筆頭寛治、筆止蟻鳳）

同三年三月四日北堀江市の側芝居豊竹此母座本にて雕刻左小刀（筆頭鶴澤寛治筆止鶴澤蟻鳳筆下別に江戸野澤庄次郎）

同四月廿七日同座にて（前）那須の與市西海硯（中）花楓都模樣（次）義經千本櫻（切）傾城阿波鳴門（大切）妹脊門松。

同四年三月廿五日同座にて濱千鳥大内軍記（筆頭鶴澤寛治筆止同清七）

同七月廿五日北堀江市の側豊竹此母座本にて（前）倭歌月見の松（中）堀江藝子の紀元（切）近頃河原達引。（三絃位置同じ）

同八月廿九日同座にて（前）大平記菊水卷（中）豊竹筑前少椽廿五回忌追善一ノ谷嫩軍記三ノ切豊竹此太夫三絃鶴澤寛治（切）近頃河原達引豊竹七重太夫三絃鶴澤清七。

同九月廿八日同座にて（前）攝津長柄人柱（切）義仲勳功記三ノ切一世一代出語豊竹此太夫三絃鶴澤寛治。

同六年十二月廿八日道頓堀西の芝居座本豊竹虎次郎（前）攝津長柄人柱（中）赤松圓心綠陣幕（次）伽羅先代萩御殿江戸十產（口）豊竹文字太夫（切）豊竹越太夫三絃野澤庄次郎（切）染模樣妹背門松（生玉ノ段）豊竹源太夫（質店の段）豊竹此太夫三絃鶴澤寛治。（三絃筆頭鶴澤清七筆止野澤庄次郎（太夫付鶴澤寛治）

同八年十月廿二日市の側芝居座本鶴澤文五郎、歌中山由緒聞書（三絃筆頭鶴澤京ゑ筆止富澤喜八）別箱放して寛二改め鶴澤花蝶翁。

同十年正月二日市の側芝居座本豊竹時太夫にて適手術菊の籤上（三絃筆頭鶴澤清七筆止鶴澤傳吉（筆下別箱鶴澤寛治）

是より引退觀西翁となる。御祝儀高砂相生の松等の手附あり、老後を養はれ長壽なりしと云ふ。（逝去年月不詳）戒名釋敎僊。

觀西翁襲名美談佳話集

☆口上

今度の梅本香伯師の二代觀西翁襲名以前の豊竹若太夫問題に就いては、帝都因會の會員であり、同時に會長選擧の際にはちやんと居合して、自らも一票を投じてゐる嚴太夫が、誰が見ても自分の私情をさらけ出して、最高點で當選した會長に新年早々自己宣傳の喧嘩を自分の機關誌に發表して、心ある義太夫關係者の不快と嘲笑を買つたが、餘りにもあれでは義太夫界の惡宣傳に過ぎるので、茲では一つ、二代觀西翁襲名に就いての美談佳話をひろつてお目にかけたいと思ふ。

☆藝人の禮儀

香伯會の千鶴、松寶、清華といふ素義のお歴々が下阪されて、何により驚いたのは、あちらの藝人達の禮儀正しい事であつたといふ。

即ち某料亭でいよ〳〵二代觀西翁襲名の手打ちが行はた時に、先づ一番はじめに來てゐた叶太夫が、次に友次郎が座に現れると、直ぐさまその上席を讓り、今度津太夫が姿を見せると、忽ち友次郎が自らの上席を讓つてその下座に坐つたといふ。一寸した事といへばそれ迄だが嚴太夫が自らの會長にあれ程醜惡な迄に蔑視した事と何んといふ相違であらうかなる程それ〴〵人一倍多忙な三氏が、はる〳〵何日間かの貴重な時間を割いて大阪くんだり迄出掛けられたのだから、叶太夫も羨む筈であらう。

或る時、叶太夫は清華氏のお宅に一泊したさうだが、その折寢床に入つた叶太夫の蒲團を、寒くはないか〳〵と上からたたいて氣を使つた清華氏の事を、彼は今でも、心から感謝してゐるのである。

☆叶太夫羨む

全て事圓滿に目出度く襲名の手打が終つた後、叶太夫は目に一杯泪をためて、觀西翁の幸福を羨んだといふ。

といふのは、如何に多くの富貧があらうとも、また如何に巨萬の財を持つ富貧があらうとも、觀西翁に對する香伯會の方々のやうな事は、廣い大阪の土地の素義には無いといつて羨んださうである。

☆子供と大人

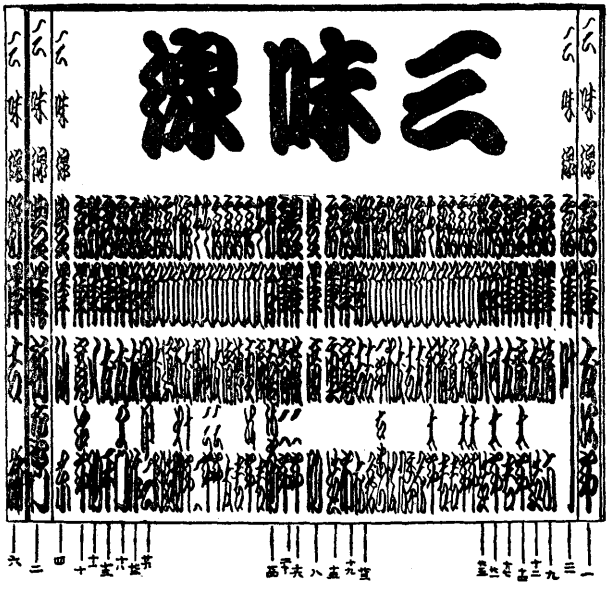
今度のごちや〳〵で、結局一人相撲に終つて、しかも土俵から物の見事に轉り落ちたのは嚴太夫で、あれ程病犬のやうにふつかけて來た喧嘩を、たうとう買はずに、ぴたりと、より立派な名跡を襲つたのは、誰の目からも、大人と子供である

☆友次郎のお土産說

友次郎は名にし負ふ今大閤といはれる程の人物だが、今度の立派な捌きには益々男前を上げ、誰一人これに反對する者はゐないが、友次郎曰く「若太夫を襲名して歸られたのでは、折角大阪迄來られたお土産になりまへん」と。

文樂樂屋圖譜（廿七）

宮尾しげを



太夫付の例

文樂三味線彈の番付讀方

番付の上部左方に大きく三味線とある下に並んでゐるのが太夫さんに無くては成らない三味線の人々です。順序は番付下の番號によつて讀んで下さい、鶴澤、豊澤、野澤の三ツの澤がありますが、正確に書いてあるのを本澤と云ひ、やゝ略したのを半澤、ぐつと略したのを假名澤と云つてます。これは、その階級を意味するものでありますので、非常に注意を要します。尙この番付の中に、道八と綱造が拔けてますが、これは三味線の番付に入れる位置に困りますので、太夫付と稱して、太夫の側に入れて別格扱ひにしてあります。然し此れは腕の力と違ひ席順は次の如くなります、（これは樂屋の部屋順であります）

本澤　友治郎、新左衛門、叶、仙糸、道八、吉彌、綱造、廣助、清六、寛治郎、八助、友造、友平、廣太郎、重造、猿二郎、友若、友ェ門、寛市、清二郎、叶太郎、友作、吉左、喜代之助、八造、園伊三

半澤　鶴太郎、友駒、友太郎、道造、寛若、市之助、清若、友十郎、友花、新太郎、廣二、仙三郎、吉李、友三郎、友丸、清友、市松、德若、一郎右衛門、吉藏、金次郎

假名澤

ラヂオ演藝評

大阪素義　〔十二月十九日〕

繪本太功記 —尼ヶ崎の段—

吾孫子　櫓
絃　豊澤龍市
德右衛門　竹本住龍
駒澤　竹本旭次
岩代　豊竹照觀
絃　豊澤小住
琴　豊澤團秀

太閤を三回重ねたといふ上方素義の大天狗、放送も三回目とある、櫓氏の上るりは、定評のあるものであらう、前をうろぬいて、操の鏡まで、かいなでの玄人跣足とはこの事で、しつかりした上に間もよく、調子もよいのであるから、もう結構と申すより外はない。

大阪のスタヂオからである。宿屋など女義のカケ合には格好なものであるが、深雪だけが役が好過ぎるので、役割に骨の折れる事もあらうか。當日は押し詰つた暮れの廿六日の、晝間演奏の時間と來ては、それがたとへ日曜だとは言へ、餘程の熱心家か、閑な御隱居の外は、多く聽いては居なかつたであらう。我等、この御隱居の方か熱心家の玉か、とにもかくにも、半分以上謹聽したのであつた。深雪の出からであつたらしい。雛昇といふ人は、新聞の寫眞によると、福よかな美しい顏だち、イヤ、ラヂオでは見えませんが、今賣出しの若手らしく、美聲を盛んに振つて居た。小住姐さんが、これを好い加減に（失禮）あしらつてゐる。駒澤は大層氣取つてゐるといふ風に聽こへたが……岩代は、かなり張つては居たが敵役には成らなかつた。若いにしては德右衛門が達者にやつてゐた。お琴評なし、イヤ神妙々々。

大阪女義　〔十二月廿六日〕

增補生寫朝顏話 —宿屋の段—

深雪　竹本雛昇

文樂紋下　〔一月四日〕

傾城反魂香 —土佐將監閑居の段—

竹本津太夫
絃　鶴澤綱造

新春に入つての第一回淨曲演奏である所謂豪華版として、紋下津太夫師の『吃又』を大阪北陽演舞場からの中繼である。沼津や熊谷やと共に紋下得意の引き吃、時間は四十五分間、寅年に因んでの演し物ながら、前の虎が現はれて、百姓共の騷ぐ所、修理の介が、師命によつてこの寅を描き消す條りは、端場として、

他の太夫の持場とあり、津太夫は、又平何ぞいひたげに……のあたりからであるさすがに、當代、先づは此の師のものとうなづかれ『吃でなくば、斯うはあるまい、ヱヽヽ、恨めしい喉笛を……』や『オツ突け、コヽ、殺せ、ハハハ放しやせぬぞ』や『女房を取つて投げ、踏みつけ〳〵地團太踏み』や、數へられぬ力の入れ方『姿は苦に朽るとも、名は石魂にとゞまれと』など、ちよつと他に眞似人もあるまい。去るほどに鎌倉殿――』の狂言詞も結構なり、無論、段切まで息を拔かず、唯だ最後の『らりるれろ、まみむめも』はまだ宜けれど『言ふは〳〵何をいふ』以下は、やゝ鮮やかさを缺いてゐたが、とにかく、おもしろい事であつた。綱造師の絃も、いつもよりは愼しんで、彈まくるといふ風に聽えなかつたはよろしい。

東京女義　〔一月八日〕

近頃河原の達引　＝堀川の段＝

彈語り　竹本素女
ツレ彈　竹本素右衛門

此の程辭表を出したとかいふが、素女さんは、帝都女子因會の理事長であつて東京女義群の、大御所とも言へる。が、今夜の放送は、傷病將士慰問の夕、といふので、他の歌謠曲や、落語や、漫談や浪花節やとコミで、堀川といふ大物を、時間もタツタ二十分である。氣を入れて聽くがものはなく、『何と詞もデン兵衛』あたりから、飛ばして直ぐに、此の曲の眼目たる猿廻しの三味線を聽かせるのであつた。と申しては甚だ失禮ながら、當夜のお容樣は、勿論これでも御偈采の事と思ふが、ツレ引との調子が、結局最後まで會はず仕舞ひに、アナ君曰く『義太夫は終りました、次は……』

大阪故老　〔一月二十日〕

義經千本櫻　＝吉野山の段＝

竹本角太夫
絃　豊澤新造
ツレ　豊澤新三郎
豊澤新吉

おはやし連中

文樂座こそハミ出したれ、阪地で、ドツカリと地盤を持つて一方を押へてゐる此の人。六十七歳の高齢？にも拘はらず道行太夫として賣つた美聲未だ衰へずとあつて『初音旅』をツレ引ともに三挺の三味線と、おはやし入りで相勤める、賑やかな事であつた。『しらべあやなす音につれて』の靜御前もうつくしく、『實に此鎧を賜はりしも、兄繼信が忠勤なり』からの、例の壇の浦の物語もおもしろく『のぢの春風吹きはらひ、雲と見まがふ三芳野の』の段切まで、さすがに十八番と、謹聽々々。

民刑事
商事事件
特許事件
迅速懇切に取扱ふ

辯護士
法學士
俳號 かなめ
飛石久太郎
東京市牛込區東五軒町五四
市電東五軒町停留場際
電話牛込(34)五七四七番

相場道三十年

わが隨感錄（十）

近江清華

無理のある人生

私の知人でも、思はしくなくなつた人、又成功者でありながらも、思はぬ非業の死を遂たり、最後のよろしくなかつた人なども往々ありますが、これは、よくよく觀察しますと、必ず「無理のある人生」をつくつてゐたと思はれる節が必ずあるものであります。

「流水不爭先」といふ言葉がありますが、このやうな生き方でなくてはいけない。

いくら仕事でも、無理押の仕事には必ず破綻が來るものであります。

「運命か、これわが作るところのもの」

と豪語したといふナポレオンも、己を過信しての盲進の前には、あのやうな悲慘な終りが待つてゐたやうに、無理のある人生は最後の勝利とはいへないやうです。

家康は、英雄の中では、一番「流水不爭先」的人物であつたやうです。

信長はこの反對で、非常に性格的にみて、多色多彩、變化にも富み、劇的人物で、人間的面白さといふ點からいへば、一番面白い人物ではありますが、この「流水不爭先」といふ言葉からは、凡そ遠い生活をし、生き方をした人でありました。

終りは、その無理の結果としての「本能寺」であつたやうであります。

「無理」が通れば「道理ひつこむ」といふ古つぼい言葉がありますが、この引込むといふのは自然に引込むものではなくて、「よける」のであり、「避ける」のでありますから、必ずその反動が強ければ強いだけ、多く「無理」の方にやつてくるわけであります。

引込んだ道理がそのまゝ無理を通させるわけにはいかないのであります。だから、何をおいても「無理押」をしてはいけない。

これは決して「弱くあれ」といふのではありません、強くなくてはならぬことは、この世の中、あくまで、強い意志をもつてゐなければいけない。が、「無理」強られたところの強さ、つくられた不道理――それがあつてはいけないのであります。

相場などの道に於ては、とくにその點、心がけなければなりません。

「無理」な相場の仕掛け方には、必ず、「無理」の反動の「破綻」が待つてゐるものであります。

つまり「自然力」の反撥といふものがそこに強烈な力を現はすからであります。

達人

達人とはいかなる人をいふのでせう。私は常に斯く思ふのであります。

世間のいかなる職務職業の中にあつても、第一人者といはれ、達人と呼ばれるところの人といふものは、決して、小才を利す人ではありません。常に、その度量、智能、觀察、研究、判斷、批判、その他、あらゆることにかけて、目先的な小利巧な、小刀細工的な人物でなく、どこか異つた、大哲學者――いや、大哲人といつた方がピンと來るやうですが――さういつたところの人物であるやうに考へられるのであります。

いかに人生がせち辛くなつて、出世の道が、閉られてゐるといつてみても、達人はやはり達人、必ず、そのやり難い道を打破つて、ずば抜けた業績を殘し、足跡を止めてゆくものであります。

よくよく考へてみれば、どの時代だつて、「今、自分の立つてゐる、生きてゐる時代が一番よい時代である」と思ふ時代は恐らくありますまい。否斷じてなかつたと思ひます。

誰も、かれも、自分の時代は前の時代より生き難い、いやな時世と思つたに違ひありません。

そして、次の時代は、少くとも自分の時代よりも、もつといゝと思つたに違ひありません。これが小人の世間觀、俗物的人生觀といふのであります。

いついかなる時代とも不安の時代。不安の世相。

生き難い、いやな時代なのであります。そのいやな不安な時代に、肚をすえて打切つて、通りぬけてゆくところにこそ人生の尊さや樂しさがあるのです。

「不安な世相」とは、わが身一つの上にだけあると思ふべきではない。いついかなる時代も「不安」であり「不滿」の時代なのですから、先づそれをいかに達觀すべきか――と思ふのでありますが。

あとがきのこと

僅々半月に足らぬ時間で、多忙極まる間にペンをとつて、大體の項目を別つて、ただ思ひつくまゝにかいてみたので、讀みかへしてみたなら、我乍ら、不滿だらけと思ふのでありまして、實は、この中で、一番かきたいと思ふ數項の中で特に、

「思ひ出す人々」

だけは、充分面白いものをかいてみたいと思ひ、いや、これだけは面白いものがかけると思つておりましたが、つい、歳未も近づき、約束の時が餘り早くたちましたので、殘念乍ら中絶してしまひました。

しかし、これは、時を待つて、ぜひ、二三百頁の面白い隨筆風なものに仕上げてみたいと思つてゐるのであります。

三十年――振返りみれば長い年月でありました。

そして、色々の人を思ひ出します。かうしてペンをもつてゐても、あの人の顏、この人の性格、はては、あの人の相場の張り方、あの人の奇行と――實にさまざまな人生が思ひ泛び、これだけはぜひ、近い將來にうんと身をいれて書いてみたいと思つております。

「明るい隨筆」とでもして、自分の好む「淨瑠璃文學」のことや、「芝居噺」まあ、今度は處女出版であり、それと餘り短時間のこととて誠に意に滿せぬ次第であります。

しかし、相場に關する一つの手法――そしてこれが唯一無二の道――

敎へて敎へられるものでなく、天によつて學びとる。百卷の書につくことの無意味さ、眞に相場道の達人たらんと欲すれば、先ず人間として達人であらねばならぬといふことを十數項目の間に私は、語つたつもりであります。

これは甚だ、不親切のやうではありますが、實は、一番親切な言葉と私は、敢て申上るのであります。

何故ならば、どの世間の成功者をみても決して、それが尋常一樣の勉學努力ではなく自ら、新しくきり開いてゆく新しい道であつたのをみても、又、そして一樣に天から降つてくる幸運だけではなく、實に正しい苦闘と、正しい大方針を秘められてゐたことを考へれば、この至難な經濟界で成功しようと欲する以上、先づ人間を創ることが第一の問題であり肚、膽をすえて、眼を閉じて觀る世界――心眼に映る世界の姿。

そこにこそ、至極困難なる道をも打破る太陽の光がはつきりと望み得られるのでありませう。

成功不成功は第二の問題、自棄的に自分を放り出すのではなく、達人が、達人劍として無想劍――この境地こそ、この境界こそ、唯一無二、人間生き拔く必勝――の途であらうと考へるのであります。

言ふは易く行ふは難い――

といひますが、實際、言ふは易く行ふは難いのであります。かういふことも亦、言ふは易く行ふは難き言でもありませうか。

政治家も、軍人も、學者も、相場人も、小說家も、由來第一流の人物は、どこへすえても、第一流の人物、何をやらしてもやれる人でありませう。

そして、さういふ人でなくては、第一人者とはいへず、又達人とはいへません。更に、さういふ人でなければ、一藝に長し人の目標たる人ではなく、成功者とはいへず、又成功者ともなり得られぬでありませう。

相場に限らず、ありとあらゆるもの十中八九までは、生きて呼吸してゐるのが、その職業の眞の姿であり、本體であります。それをナメてかゝり、甘くみくびつてかかれば必ず、大怪我の因であります。

寧ろ近寄るべからず。

私が敢て、「あし（封線）」の見方とか、相場の仕掛方とか、資金だとか、利廻りだとかいふ相場道の常識に觸れなかつたことは、右樣の次第であります。

―終―

素義風流線

——芳河士——

歸山歸世花氏

明治の末から大正へかけて俳壇に一時三字號が流行して、當時碧梧桐氏が選をしてゐられた『日本及日本人』の俳壇には、春又春だとか、八重櫻、一碧樓、三幹竹等々、隨分三字號の人が並んだものでした。僕なども矢張りその一人です。

義太夫界に歸世花といふ三字號を見つけた時は、これはテツキリ俳人だなと思ひ、しかも、雅號から考いて俳人なら作句盛りの年配、義太夫もその通り、油ののつた語り盛りの好男子とばかり、なつかしく思ひをめぐらせてゐたのです。

處が、きよはなさんとかきせはなさんとかといふ言葉を、箱屋の口から耳にするやうになつて、オヤ女の方かなと、それでも半信半疑で、幕の上がるのを樂しみに待つたものでした。幕があがつて箱屋の口上が終ると、頭をあげて見臺に向はれたその姿勢の堂々と何んと立派な御婦人に一驚すると同時に、作句盛りの年配、語り盛りの好男子といふ聯想が男ならぬ歸世花さんにぴつたり當て適つた事が不思議の位に又うれしいでした。

さもあるべき事でした。夫君は三年前に永眠されましたが、歸松と號して根岸派の俳人で、義太夫は毎晩語りまはつて御自分だけでは語り足らず、夫人にまでお稽古をすゝめて、とう〳〵御夫婦揃つて語りまはるといふ有樣であつたさうで、歸世花の號も、離れていゝ語り口の伺はれるのも、これ皆脫俗した夫君の俳味の息がかゝつた薫陶の現れであらうか。

令息は野戰重砲兵の甲種で、第一補充にまはされ、十二月から何時召集されるか知れぬと待機中も、母堂に孝養怠りなく、故歸松氏のものされた短冊は床にかけられて、此の圓滿の御家庭を見まもつてゐられるかのやうであります。

音曲昔噺素養（七）

大阪　鐵　老（寄）

今昔耳鳥齋主人の號は浪花音曲研究古考家として其名廣く、舊與銘人の事を辨へ、世上に融通せり。「文政の通人古太瓶藥居」親しく門に入て聞くに「昔噺の滋味理曉を、草紙の端に書きとゞめ、友樂初心者助けにもと」云々とあり、撰擇して敢て一夕の笑樂の具に供し參らせん。

外連決といふ由所

けれん決といふ論は、是はもと岡又を眞似過してより出たることなり。又兵衛岡太夫は元と筑前椽の弟子なりしが、先師古人となりてより、西口政太夫に隨て、專ら播磨場を語りて、大政入道兵庫岬の三段目、是に大當りせしなり。又は富士日記三段目も能く語る、至つて正しき藝なりしが、三度目くり返し忠臣藏出されし時、九段目を勸め是また大當りして大評判遠近に振ふ。

是より後良々もすれば、筑前場を語りしが次第〳〵に年積りて、一二の音薄くなり、聲を釣るに從ふて、無性に未にて操りあげくり亂し語る故に、自然と治定ならざりけり、されども本正しき藝なるゆゑ、諸人是に隨ひ此風儀を慕ひ覺へたり。

當世の筑前場を聽くに、何れも皆岡又の流儀なり、筑前椽は銘人なり治り無きことは語られず、今世の人是を知らず、くり上るのを筑前と心得、地合はのら猫の如き聲を出し、「スエ」フシを見付ると、文句の廣狹大小を論せず、「スエテ」差しうつむいても、「スエテ」どうと伏しても、「スエテ」しばし詞も、「クル」前後を知らず「クル」泣涕こがれても、聲のあらん限りくり上げ語る。是情に外づれて文

新春いろは問答

森　三好

（い）いつ軍さは濟みますか（ろ）露西亞との平和を保てば遠からず終局（は）初から支那が不法交戰でしよう（に）日本は好んで始めたのでない（ほ）殆んど全敗の樣に見へます（へ）下手な戰術に赤心がない支軍（と）東洋平和は愈々完成せり（さ）千代に八千代に凌威の賜（り）陸海軍の激戰は實に目覺しい（ぬ）ぬかりもすきもなく懸命の活躍（る）類例の無い皇軍の連勝（を）雄々しき勇士と銃後の奉公（わ）我皇國は萬國無雙（か）斯かる國體に生れし幸福（よ）世の中に凱旋程嬉しい事はなし（れ）連綿として榮え增す竹の園生は（そ）總動員で尊ぶ神國（つ）常々忠君愛國に（ね）

句の意味は解らず、たとへば絹川堤の淨瑠璃に、老のくりこと恩愛のと云ふ文句、大きに操り上げたり。六十有余の老人、殊に立役なり、是等は了簡違ひなり。されども岡又かく語りし故、辨へなき人は此所大事とくり上げ語る、筑前はかくの如き無調法は有まじ。錢屋此太夫は生得聲細く、音力甲斐なきゆゑ口中味梅は似せず、たゞ筑前の腹持詞の情を能く語るゆゑ、上手の名を得出せり。平右衞門嶋太夫。元祖駒太夫、内匠大和、此三人共大和彦太夫を似せて語る、なれども皆儕〳〵が信ずる所に一利ありて、風儀替はると雖水上淸きゆへ何れも銘人の評を得たり、いまの世の淨瑠璃多くは、外連を習ひて、見物に譽めさせたひといふ心先き立つゆへ、肝心の元を失ひ、さまでもなき事を仰山に語るなり。耳に起つて聽飽するゆへ、二段とは聞かず是本義太夫節の實意知らざる故なり。

無理當自然の解

義太夫節は陽中の陰なり、一段語る中に見物の譽るにも、所によりては邪魔になり、座敷淨瑠璃抔も皿鉢の鳴音にも、また耳妨となり、淨瑠璃の情を失ひ、始終の障りとなる者なり。當世の人は見物に早く、譽めさせん事を心懸け、三下り四下り語る中に、無理に當節を拵へ聲をかけさす、是をつかまへるといふ。恰度欠落ち者の追手と取違居ると見へかはり、見物の心に自然とこたへヨルトほめるのを中の譽とする。眞實感心の餘りアット腹の内へかんずるを上の譽とする。ワア〳〵と譽めるのは下の譽なり。

歌舞伎役者元祖といへる嵐小六は、初日に見物の譽る所は拔き、又二日目に譽る所はぬき、幕をひいて後嗚呼面白かりしと感ずる樣にせしは、是見ざめさせぬ工夫、心の巧しき所なり。何勢にても油厚味過ぎかはるは、長持のせぬ者なり。

有隣大和は度々見物の譽める日あれば、床より下りて腹を立て不作法なる見物なりと云しとなり、此意尤も高し、今は見物ワア〳〵と譽めるを當りと心得、なほ〳〵當て節を思ひ付き、女形のせりふは、さまでもない文句にもサワリをつけ、姫も傾城も娘も解らず、けれんをつかひ下品にもいやらしく、如何程嗜よき女も無性にくさ〳〵き聲かはりき。昔播磨の語りし檻樓錦出立の段、「後に於春が操り言の」たとへばさつきの四の字づくし、といふ文のふし付け、五百石取の女房年ばへ生立節に顯れ、東西の太夫みな感じかはりしといふ。

念を込めたる淨曲研究（な）南京陷落大勝利は（ら）雷鳴の如く祝賀萬歲（む）無理の無い我皇軍は（う）宇内に激賞せられたり（ゐ）愈々支那は我が支配（の）納稅軍備、法規掌握（お）多くの移民國力恢復（く）國は富んで天下太平（や）靖國の神となられし皇軍將士は（ま）萬古末代國の礎（け）懸命になれば出來ますや（ふ）不思議と思ふ程出來得る（こ）講和談判は最も大切（え）永遠に發展の基礎ならん（て）天に代りて不義を討てば（あ）飽く迄基く我帝國（さ）櫻は武士の魂と聞く（き）規律正しく咲いて散る（ゆ）夢と思ふ程早いのは何か（め）名勇士の空爆と支那の陷落（み）未曾有の大戰と存じます（し）史上に殘る彼我の大軍（ゑ）永久後世に紀念しませう（ひ）飛行の活躍拔群の戰功（も）最早や芽出度凱旋ならん（せ）世界に譽く萬歲の聲（す）すみ〳〵迄も津々浦々（ん）んと大勢提灯や旗行列で人の海（京）今日は目出度き十三年、平和となれば舊倍盛會益々研究練磨致さん

つばめ去りし後の『新義座』

益々堅實な陣容の成立

『四ツ橋の本據をニュース映畫に占據された文樂の一座は、其後新町北陽演舞場を臨時貸借し興行してゐるが、時勢に遲れ勝ちな古典藝術の上に、最近では土佐、友治郎引退でメンバーに魅力を欠き、愈々此の傳統を誇る義太夫の本場にも衰退の兆明らかとなつて來たのでこれが補强對策に腐心してゐたが、遂に先年興行方針の不滿から文樂を退き、新義座を組織したつばめに白羽の矢を立て、師古靱太夫をして文樂復歸を交渉せしめた處、主義として復歸は潔よしとせぬが、古靱太夫との師弟の情もだしがたく遂に四日承諾を決しその旨文樂當事者に通告した、松竹は極秘に附してゐるが、來る四月から織太夫と改名の上文樂の床に返り咲くものと見られる』

以上は二月七日付の大阪毎夕に記載されたものでありますが、つばめ去りし後の『新義座』に就てお話を伺ふべく、病氣中の富取に代りて、ふつゝか乍ら私が東京の事務所志保屋吉田美地句さんのお宅をお訪れ致しました以下美地句氏のお話であります。

『つばめ太夫は藝術上に疑を抱くやうになつたといふやうな事を大阪毎日に話してゐますが、此の言葉に就ては一寸判斷がつきませんが、兎に角、新義座から拔けて文樂へ復歸するといふ事に就てはつばめ太夫の人格を疑ひたくなります。大體新義座組織に就ては昭和十一年の正月最初につばめ太夫が持込んで來たので、我々に相談があり一同と協議の上各師匠も藝術修業の爲めと心よく承諾し、なほ古靱太夫師は大に此擧を賛成されてつばめを手許から離されたのであります。私も一同の話を聞き昔から例のある事だから、修業の爲めには好季でもあり新義座組織に賛成したのですが、こんなに早くつばめ太夫が拔けるとは思はなかつた。その事に就て、大垣の吉岡氏が歳末上京の際、いろ〳〵御心配に預り協議の決果、勝平氏が古靱太夫師に面談する事になり、同氏から

『新義座も愈々皆樣に認められるやうになつて來た矢先、つばめ太夫を引拔かれる事はどういふわけですか、それでは約束が違ふ、歸るのなら全部行動を共にして文樂へ復歸する事になつてゐるのに、つばめ太夫一人が歸るといふ事は無い筈だ』

と古靱太夫師に詰じつたのでした。處が古靱太夫師は

『こんな事をいふのは自分は無茶であるが何んと言はれても申譯がありませんが、返して貰ひたい』

の一點張りであるので、勝平師は『それではあなたが新義座へ加入していたゞけませんか』とまで切込んだ處『自分は種々事情複雜の爲め今松竹から拔けるわけに行きません』との返答に、勝平氏は餘儀なく歸りました。

『それでは新義座の殘黨は今後どうなりますか』と私は伺ひました處、美地句氏は

『殘黨は野たれ死にをしても新義座を盛り立てゝ行くといふ決意を堅めてゐます。』

『それでは古靱さんは自分が綱太夫になつて、つばめさんに古靱を名乘らせる爲めに拔いたのでせうか』

『まあさうですね、後でわかる事を初めにそれを言はずに秘して置いたのは古靱師にも何か深い考いがあるのでせう』

美地句さんのお宅を辭して、歸途二三の方々をお訪れ致しましたが『自分で卒先をして組織した新義座を、自分の都合で一黨をふり捨てゝ自分一人が文樂へ歸るなんて仁義も道德も辯まひぬ不埒なものである』と、大變の不評判でありました。

だがしかし、ファンの皆樣御安心下さい。玆にはその發表を暫く控える事に致しましたがつばめ太夫去りし後の新義座は、南部太夫の大なる熱演と努力は申す迄もありませんが、これに加ふるに阪地に錚々たる某太夫二氏が特別出演する事になつてゐますので、早くも殘黨に集る同情と、此の二太夫特別出演の人氣は、素晴らしいものであります。(三久子記)

岡田蝶花形氏へ

☆本誌新年號編輯後記に、安藤鶴夫氏が蝶花形とかいふごじんの、椎茸耳の愚評を怒られて筆誅するといふ事を書きましたが早速淨瑠璃時報の二月一日號で「太棹」及び安藤氏へ右編輯後記の記事に就き一文を物されましたが、あの後記はある時の座談に、蝶花形先生の噂が出て、椎茸耳の惡評が餘りにうるさいから暇があつたら一本參らうかといふお話であつたので、勿論筆誅と申す程のたいした問題ではなし、新年號發行後安藤氏にお逢ひした時、今年からは最早や下らない事を怒らぬ事にしたからあれは一寸困るとの話があり、其以前から蝶花形先生の書くものを見てゐられて、最早や取り上げてどうかうといふ程のものでないといはれてゐた事なので、玆に私の編輯後記が安藤氏に御迷惑をお掛けした事をお詫び申しておきます。

☆それから蝶花形先生の右文章中「太棹」は他人の惡口を書く雜誌と思ふと怖氣がついて、投書出來ないといふ一節がありますが、これはまことに奇妙な事で、敢て泥試合は致しませんが、他人の惡口を大々的に書いて、同時に自己宣傳をしてゐる義太夫誌は燈臺下暗しで、どつかそちら樣の近くにあるのではないでせうか。尤も「太棹」は堂々正義の旗を揭げて、義太夫界の淨玻璃の鏡を以て任じてゐますので、今後も不正なる愚論は飽く迄筆誅致しますが、人樣の惡口などは從來通り申さぬ事になつてをります。尤も愚にもつかぬ文章は、事義太夫に關する限り、如何に投書されましても殘念乍ら沒書に致す事も一寸申添えておきます。

☆それから私の編輯後記から安藤氏に不快を與へたのですから、それ亦一寸蝶花形先生にお斷り申しておきますが、安藤氏はお父うさんの都太夫師をどう批評されたからといつて、誰方かのやうに私憤の爲にどうかうといふやうな方ではありません。親子三代にわたる江戸ッ子、しかも他に對してあれ程嚴正な批評を書かれる方ですから、同時に都太夫師には最も手酷い批評家で、お父うさんの不出來の時は當分口も利かないといふやうな話は既に聞き及びの方もある位です。安藤氏を最も眞面目な嚴正な批評家と申す一例は、あれ程好きな古靱太夫師に就いてさへ、缺點は缺點としてびたり書かれてゐる事で、どこかの先生の如く藝人に交際があるからといつて、御自分の夫人に迄椎茸耳の素人評を書かせて、その藝人に齒の浮くやうな世辭をいふのとは代物が違ひます。眞に義太夫を思ふ批評家としての鶴夫、素義としての都昇氏の場合藝人の息子としてどうかういはれる事は、安藤氏の最も不愉快に思はれる事なので、序にこれも申上げておきませう。

——芳河士——

太棹社報

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

東都五十義會の新年會未曾有の盛況

昨年度より新しき理事、幹事諸氏の熱烈なる奮闘活躍によつて、たとへ昨年秋期審査會は事變の爲休會とはなつても、皇軍慰問の義太夫大會等に着々として、大東京素義團體の面目を發揮せる同會は戰捷の新年を祝し併せて會員諸氏の新睦を兼ね、一月廿四日午後五時より大森海岸三芳に、華々しき新年宴會を張つた。

如何に同會が好意を以て東都素義の諸氏に迎へられてゐるかを證據立てるやうに、五十義會の永い歴史上未曾有の盛況は實に四十七氏の出席を得、和氣一堂に充滿、それ〳〵大滿足裡に九時半頃散會、近來稀に見る盛宴であつた。

席上發表された重要事項は、近日會則の草案を會員へ配付し、不備な點を改めて完全なる會則を制定する事、五月中旬には華々しく審査會を開催する事に決定、他に相談役に國友東光、幹事に野崎龜鶴、清水清司、鈴木其芳の諸氏が新に就任された事を發表。

兜會花組春季大會

時折例會を開き練磨精進に餘念なき兜會の花組は、戰捷祝賀を兼ね春季大會を二月五日正午より白木屋ホールに於て開催したが、例に依て同會の人氣は各方面より應援者を集め、非常な盛會を極めた。

先代（三葵、團市）帶屋（和か葉、猿三郎）陣谷（春樂、猿幸）野崎（泉、司好）太十（八雲、芳太郎）合邦（團壽、米翁）赤垣（美浪、團八）布四（松蝶、米翁）

中老會生る

高瀨操、和田春和、木下松玉、保谷紅司、西田可松の五氏により中老會が組織され、第一回を一月十五日入谷倶樂部で開催、しつかりした語り手のお揃えとて強みもあり評判もよし、語り場順まはりで本月十三日第二回を文化倶樂部で開催することになつたが、當日の番組は左の

通り。

紙治（操、道之助）八陣（可松、粂造）酒屋（松玉、玉勝）忠四（春和、粂造）寺子屋（紅司、玉勝）

軍人會館に於ける南北座の盛況

大日本國防婦人會小石川分會主催の出征將士家旗慰安會は池田勝一氏主宰の南北座を招聘し、一月廿二日午後六時より九段下軍人會館に於て開催されたが、定刻前より押しかけた聽衆は忽ち彼の大講堂も立錐の餘地なき迄の滿員となり、婦人會幹部諸孃は右往左往、客の案内やら接待に狂奔の有樣近來稀な盛況であつた。

新口村（都昇、都太夫）先代（美峰、猿之助）朝顔（司重、團吉、紋三郎）辨慶（國聲、猿三郎）人形＝忠兵衛、駒澤しのぶ（かもめ）梅川、政岡、深雪、おわさ（三國）八汐、岩代、辨慶（千鳥）孫右衛門、榮、德右衛門（柳）沖ノ井、侍從太郎（霞）千松、花ノ井（小雪）郷ノ君（傳次）

野澤道之助義太夫初會

一月十九日淺草松屋ホールに開催、當日は都合上金鳳氏の欠演は淋しかりしも清氏が大阪より飛行機で歸京出演の熱心に、樂屋は新春の氣分に滿たされ、聽衆も思ひの外動かず、各自十八番物を力演して芽出度散會。

辨慶（千昇）先代（喜鳳）日吉（正鳳）太十（筑波）逆櫓（旭）鮨屋（操）野崎（清）大切（白浪五人男）駄右衛門（清）菊之助（喜鳳）忠信（操）赤星（正鳳）南郷（千昇）絃（道之助、越道）

仲澤三朗會

二月一日新宿多加良倶樂部に開催。

朝顔（龜遊）壺坂（時昇）揚屋（清勝）本下（さとる）十種香（東）太十（東松）日吉（淺路）柳（專好）酒屋（かなめ）合邦（枝蝶）絃（三朗、三好、竹本佳仙）

山田家の慶事

本誌名譽會員山田壽瓢氏の五女京華高女出身の好子さんは、金原藤一氏の媒妁にて栃木縣の素封家東原清一氏の令弟帝大經濟部出身、目下明治製菓勤務中の繁次氏と二月六日軍人會館にて芽出度華燭の典を擧げられた。

松本家の慶事

本誌名譽會員松本朝章氏長女嘉子さんは、眞田幸造、栗谷清市兩氏御夫妻の媒

妁により、永年吉井商店に勤務中の眞田清水氏と婚約整ひ、二月一日芽出度式典を擧げられ、相續人として今後松本商店の和洋傘製造販賣業に從事さるゝ事になつた。

襲名と引退

豪華を極むる

竹本津賀太夫引退興行

時局に鑑み昨秋から延期となつてゐた竹本津賀太夫師の引退興行は、愈々來る三月廿八日左記番組のもとに華々しく歌舞伎座に於て開催する事になつた。

豊竹古靱太夫 八代目竹本綱太夫を襲名。

豊竹つばめ太夫 三代目豊竹古靱太夫を襲名。

鶴澤友治郎 引退

湊町＝お夏（津賀昇）清十郎（駒龍）お梅（津賀龍）お兼（團雀）德左衞門（小津賀）德次郎（津賀重）小半（巴龍）佐治兵衞（和佐之助）絃（紋敎）

殿中＝師直（さくら太夫）判官（麗太夫）若狹之助（扇賀太夫）伴內、本藏（里太夫）絃（延左衞門）

太十＝光秀（駒登太夫）重次郎（巴太夫）初菊（稻太夫）操（都太夫）皐月（彌國太夫）久吉（扇賀太夫）絃（寬三郎）

野崎村＝お光（素八）お染（駒龍）久松（昇登）母（素次）下女（巴龍）久作（猿春）絃、前（駒淸）後（若好）ツレ（仙玉、猿女、駒登久、淸二、淸三、巴住）

十種香＝八重垣姫（都太夫）勝賴（朝見太夫）濡衣（駒登太夫）謙信（麗太夫）白須賀（近衞太夫）小文治（巴太夫）絃（粂造）

油屋＝貢（彌周）お紺（素廣）萬野（駒若）お鹿（播磨年）北六（佳仙）岩次（小和光）喜助（團蝶）絃、前（三生）後（猿玉）

壽式三番叟＝千歲（殿母太夫）翁（湊太夫）三番叟（朝見太夫）絃（猿之助、猿藏、芳太郎、猿喜知、猿三郎、扇之助、松四郎、美之助、蟻鳳）

挨拶。

阿古屋＝琴責（津賀太夫）絃（紋左衞門）ツレ（紋三郎）三曲（芳太郎）

沼津＝平作（殿母太夫）重兵衞（米太夫）お米（東太夫）安兵衞（麗太夫）絃（吉作、仙十郎）

鮨屋＝權太（素女）お里（重子）維盛（素昇）御臺所（鶴松）六代君（佳世子）村役人（佳津廣）母（佳照）彌左衞門（染登）梶原（播磨一）絃、前（三平）後（淸一）

河庄＝治兵衞（米太夫）小春（巖太夫）太兵衞（彌國太夫）善六（巴太夫）亭主（さくら太夫）孫右衞門（津賀太夫）絃、前（新次郎）後（新造）

一力茶屋＝由良之助（近衛太夫）おかる（浪花太夫）平右衛門（彌國太夫）絃（道之助）

道行＝小浪（小津賀）戸奈瀬（團雀）ツレ（和佐之助、津賀龍、巴龍、津賀重）絃（紋敎、三生）ツレ（巴住、駒登久、津賀昇、駒照）

顔揃ひの若手會

二月二十六日（土曜）午後六時より、時間嚴守にて、いよ〳〵待望の若手會第一回が交正倶樂部に開催される事に決定した。

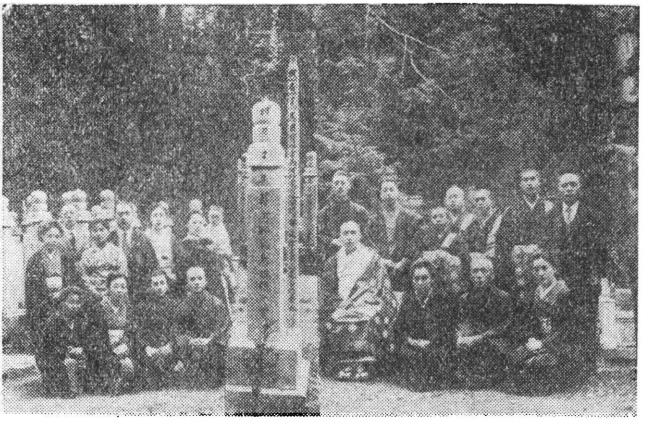
昨年末結成をみた同會は、五人の同人中二人迄突然の事情にて欠演ありたる爲清、和舟兩氏が特別出演にて開催したが、歲變りいよ〳〵義太夫界の好季節に向はんとする時に當つて、改めて同人全員總出演を以て若手會第一回を開會する事になり、二月五日夜七時より、折柄氷雨の降る中を、本所吾妻橋河岸の安藤都昇氏宅へ集合。

若手會に關する決定事項は、事務所は當分本所區吾妻橋一ノ一九安藤氏方に置き、毎月一回各所倶樂部を巡演。第二回は大體文化倶樂部と決まるらしく、語順は抽籤にて左記の通り決定。

二月廿六日（土）午後六時開演（嚴守）交正倶樂部。合邦（高尾、力彌）逆櫓（柳光、粂造）十種香（都昇、都太夫）新口村（光玉、粂造）陣屋（呂聲、力彌）大切掛合。太十（重次郎、都昇。初菊、高尾。皐月、光玉。操、柳光。久吉、光秀呂聲。絃、粂造）

故 野澤喜左衛門の法要

十一年十一月十六日七十七歲の高齡を以て永眠した野澤喜左衛門師の高弟野澤勝平氏は、地方巡業中なりし爲め本葬を延期し、昨冬十二月十九日神戸の善照寺に於て會葬者の燒香を行つたが、これより先き十月十四日高野山龍泉院に於て近親並に門弟を招きて法要を營み次いで建碑式を擧行し、記念撮影を行つた。



（寫眞向て塔の左側が野澤勝平氏）

各席 語り物帖より

一月分

大會又は番組御送付のもの、或は新らたに生れた會は彙報に記載致しますが、本欄は讀者諸賢の催しをなるべく公平に廣く報道する趣旨で、編輯締切の前日各倶樂部を一巡して集めたものであります。但し見落しは御用捨を願ひます。

——記者——

▼**鶴澤鶴玉連**（十二日・文化）壺坂（壽）酒屋（柳蝶）太十（鶴三）安達（柳汀）紘（鶴玉）

▼**三福會**（十三日・文化）柳（福松）太十（祖樂）山名屋（福代）湊町（竹聲）辨慶（福司）壺坂（鶴松）紘（三福）

▼**豐澤松榮連**（廿一日・文化）岡崎（いろは）八陣（有明）先代（一幸）岸姫（旭）紙治（和舟）

▼**鶴澤勝助連**（廿四日・文化）玉三（里芳）柳（雅樂）合邦前（福代）奥（祖樂）油屋（井孝）紘（巴川、勝助）

▼**豐澤扇之助會**（廿五日・文化）又助（茂玉）鮨屋（歸世花）梅由（巴雀）忠四（彌聲）壺坂（司）

▼**互調會**（一月廿日・文化）忠三（佳世子）十種香（山生、鹿重）八陣（みなと、良造）寺子屋（三三樂、蝶子）引窓（乃菊、佳照）近八（義雀、良造）

▼**義松會**（一月廿七日・文化）玉三（松藤）太十（豐茂）壺坂（高峰）十種香（小六）寺子屋（司若）柳（玉寶）忠四（大龍）鮨屋（富壽）紘（松造、松四郎）

▼**朝見會**（一月廿八日・文化）組打（周樂）酒屋（廣笑）壺坂（昌子）下總屋（仙昇）鳴門（昇朝）忠六（井孝）寺子屋（一竹）

▼**大東京嬉會**（九日・菊川）堀川（かなめ）先代（岡玉）太十（東松）辨慶（清勝）酒屋（園樂）壺坂前（專好）同奥（時昇）沼津（文鏡）（十日・同）鳴門（時昇）寺子屋（東松）辨慶（專好）揚屋（かなめ）鮨屋（三好）日吉（清勝）八陣（岡玉）宿屋（園樂）

▼**豐澤猿清連**（十九日・菊川）太十（蟻清）辨慶（豐）陣屋（清朝）梅忠（丸都）酒屋（秀樂）先代（柳汀）

▼**鶴澤玉勝連**（廿二日・菊川）阿漕（櫓）忠六（宏亮）辨慶（富司）太十（要）合邦（あづま）紘（玉勝、鶴助）

▼**竹本橋志保連**（廿九日・菊川）十種香（清香）壺坂（まつば）日吉（豐）太十（てつか）

▼**綾秀會**（十二日・交正）日吉（綾路）壺坂（歌吉）安達（綾登）又助（治光）先代（竹始）宿屋（壽光）合邦（龍司）野崎（壽瓢）

▼**佳照會**（十六日・交正）森（佳世子、佳仙）引窓（乃菊、佳照）本下前（柳光、佳仙）同奥（さとる、佳照）紙治（淺路佳照）酒屋（かなめ、仙君）湊町（光玉、佳照）白石（枝蝶、佳仙）

▼**巴雪會**（廿三日・交正）三日（重八）日吉（喜光）玉三（語好）寺子屋（童雀）柳（一）太十（梅勇）鳴門（榮玉）

▼**越喜太夫連**（廿九日・交正）日吉（壽美枝）新口（歌樂久）長局（一力）寺子屋（團壽）油屋（浪花）

▼**豐澤延左エ門連**（三十日・交正）安達（二三吉）辨慶（近翁）酒屋（美尙）太十（一）同奥（梅聲）合邦（喜遊）

▼野澤桑造連（廿二日・入谷）太十（小喜久）合邦（春和）八陣（有明）酒屋（鈴仲）瀧（榮樂）すしや（登盛）柳（芳生）新口（可松）

▼竹本播代連（廿六日・入谷）先代（喜樂）酒屋（辰彌）寺子屋（美登利）

▼澤鶴新造連（廿九日・入谷）太十（菊水）紙治（鶴若）梅由（登盛）寺子屋（相生）合邦（岡）

▼豐澤團市連（廿日・入谷）陣屋（清昇）鳴門（松絲）岡崎（いろは）太十（司重）寺子屋（長とろ）絃（團市、團吉）

▼鶴澤司好連（十八日・小石川）新口（皷好）松王（一好）野崎（泉）沼津（司朝）絃（司好、好造）

▼竹本都太夫連（八日・駒形）白石（都竹）酒屋（都山）太十（都昇）鳴門（都川）新口（丸都）絃（都太夫、文之助、都川）

▼淀橋、多加良、喜久本はまはり切れず失禮しました。松尾倶樂部は一回しかないので出さないでくれといふ事でした。

▼今回は同じ御連中の催しを二つ記す事を略しました。

▼掲載の順は倶樂部をまはつた順であります

▼なるべく會名と語り物を會報として御通信御願ひ申度く、御通信のあつたものは彙報又は會報欄に特記する事になつてゐます。

——三久子——

高級裁縫

秋山洋服店

秋山ゆたか

淀橋區淀橋七二二

寄贈雜誌

▼痴遊雜誌▼土▼寶塚月報▼露▲淨瑠璃時報▼獺祭▼ましろ▼柿▼文樂▼大日本淨瑠璃界▼淨曲新報▼オール演藝▼藝術往來▼藝▼京城ラヂオ▼明るい家▼あづま

◆花輪◆花束◆花籠

御送迎・御佛事・御見舞は何卒弊店へ御用命願上候

新花・廉價・迅速は弊店の特色

花

下谷稻荷町（青バス車庫前）

サカタ・フロリスト

電話（下谷）六一八一番

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

高島一廣氏
廣瀬いろは氏
岡崎円六氏
吉川浪補氏
平野ろ昇氏
阿部一氏
中澤巴氏
竹内とをる氏
安藤どくろ氏
吉田登盛氏
小川都山氏
安藤都昇氏

保々長平氏
栗原千鶴氏
神馬里芳氏
本木大熊氏
奥村沖氏
鈴木和樂氏
小林和舟氏
本多可笑氏
大和田可笑氏
飛石かなめ氏
加藤兜氏
高橋可遊氏
西田可松氏

松尾武市氏
大用大嘉津氏
田口辰壽氏
疋田大龍氏
井上巽氏
根本團壽氏
乃村素弘氏
坂倉素遊氏
浮谷祖樂氏
宮本武藏氏
萩原うつぼ氏
乃村乃菊氏
高野昇氏
中野吳羽氏
石川華笑氏

清水彌生氏
國井丸都氏
松林福笑氏
鈴木兒雀氏
水戸部壽氏
原田越巴氏
河野國聲氏
松岡語松氏
松田光風氏
寶藏寺天昇氏
大築葵氏
松本朝章氏
及川旭氏
柳有明氏
寺岡三幸氏

木村さかえ氏
平井榮氏
細川清氏
金田金鳳氏
井田菊泉氏
錦錦松氏
淺田奇聲氏
歸山歸世花氏
川奈部銀司氏
猪谷銀水氏
岩木義雀氏
岩田末成氏
高瀨操氏
吉田美地句氏
横井三由氏

野口みなと氏
岡田源氏
北村三葵氏
吉田三芳氏
鈴木松寶氏
玉井松樂氏
菊池秋月氏
平井壽樂氏
山田壽瓢氏
秀秀峯氏
田口司重氏
濱口秋華氏
武笠宏亮氏
高品一重氏
桑原美峰氏

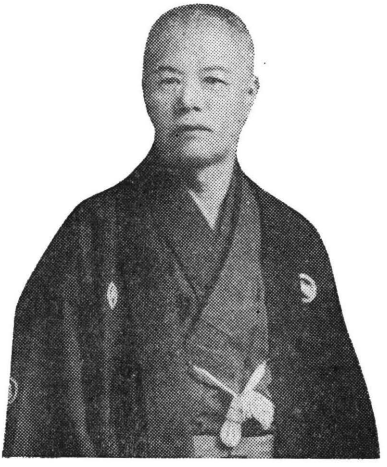
松岡茂里雄氏
白井清華氏
近江清華氏
湯原清司氏
沼井盛鶴氏
（地方之部）
米國 平野一昇氏
同 武榮玉氏
同 杉山陶岳氏
同 兼廣廣玉氏
同 西本西紫氏
樺太 宮下杉鳳氏
横濱 田島集樂氏
大垣 吉岡十八公氏

名譽會員

吉岡十八公氏

本誌後援名譽會員を御快諾賜り難有奉深謝候

太棹社



最近の金造師

故野澤金造略歴

本名林清次郎。

明治十年三月二十一日京都市椹木町に生る。

十二歳の時野澤庄次郎の門に入り金造と名乗る。

明治廿八年六月上京し、豊澤兵吉、豊澤富助の教を受け、岡太夫、薩摩太夫、柳適太夫の合三味線を勤む。

晩年、八王子に隠生し、好きな將棋を敎へ素人六段と稱す。

變骨にして改名の要なしと終生金造にて昭和十二年十二月十九日、鬼籍に入る。

八王子市元横山町、大義寺に葬る。

法名清響院樂仙金翁居士。

野澤金造を憶ふ

齋藤拳三

變骨の學徒

昨年暮の十九日、八王子の自宅で金造が忽然死んだ。當日遇然にも私は吾妻橋の竹本都太夫氏宅で安藤鶴夫君と金造の再起不能を悲しんで其の事を云ひ暮して居た。

金造と云つても知つてる人は極く少い。今の文樂でも彼と交遊のあつたのは文五郎と小兵吉位の者だらう。義太夫通の三宅周太郎氏でさへ團璃から彼の藝質を聽くまでは存在さへ知らなかつた程彼は斯界から埋もれて居た。

なぜ私は此の名もなき一三味線彈きの死を其れ程悲しみ、惜むか、其れは彼が義太夫道の野心なき學徒で有り、冷哲公平な批評家で有り、東京では二三を爭ふいゝ腕の持主だつたからである。

どうして彼は其の蘊蓄造詣を八王子の片田舍に埋らせて生涯を終つたか。

どうにもならぬ人の運命の不思議さよ！

金造本名を林清次郎といひ、明治十年三月廿一日京都市椹木町に生れた。彼の父幾三郎は赤尾樓と云ふ御所の御用を務める仕出し屋の息子だつた。下手な義太夫も語れば素人で講釋もやる仲々の道樂者で、二人の子供と女房のお駒を殘して家を飛び出してしまつた。金造は八歳まで母方の手に育ち九歳の時一人別れて貧困な父に引取られた、當時幾三郎はしかない魚屋をして居た。

彼が難澁至難な義太夫界に定まつた師匠も無く全く孤獨の苦學生として立ち、一生を變骨の學徒として片田舍におくる宿命は此時既に投げかけられたのである。

藝事好きの父は六歳の時から手に撥を結ひ附けて細の三味線の稽古をさせたが、十二歳の時京都の野澤庄次郎の內弟子にしたのである。「野澤のながれ」と云ふ野澤を名乘る三味線の代々を精細綱羅した、一冊にさへ乘つて居ない金造の藝名は、此の時手ほどきの師匠からもらつた名である。彼の兄弟

子に先に一人の金造があつて彼は其の奇妙な藝名の二代目なのである。

友次郎の前名の小庄も庄次郎の一字をとつた名と聞いて居る。變骨な彼は、

『藝人が崇拜もしない人の名を繼いで披露をするのは皆金集めです。大きい名を繼いで藝が其れにそはないのは名前盜人です』

と豪語して一生を金造でとをした。

此所にも金造の面目は躍如として居る。

十九歳の時「義太夫の修業は文樂で」の定石通り大阪に出て三代目清六の內弟子となつた。當時清六は鶴太郎時代で廿二三歳の若者だつたが、鬼才は早くも認められて當時化物として錚々たるハラ〳〵屋の呂太夫を彈いて居た。

清六は盃を手にしない人だつたが、贔負の座敷と稽古で多忙を極め二ケ月程居る間、一度三味線の調子を合せて三四分彈くのを聽いてくれただけで、一撥も稽古はしてもらへなかつたさうである。

明治廿八年六月意を決して上京した。

其の動機はよく解らないがおそらく無給の大序の生活に堪え難く、漫然東京にあこがれて東上したのであらう。

私が彼の妻女から聽いた話には、同鄕の小供時代の友人が東京のキセル工場に働いて居て、其の人を賴つて上京したが住所が解らなかつた、との事である。

現殿母太夫の說に寄ると織太夫の內弟子であつた、當時の織江太夫即ち今の殿母太夫を賴つて上京したと云つてゐるが殿母太夫の說は可成出たらめで、私には信用出來ないが、此の一點は事實らしいから、或は其の友人が解らないで織江太夫の所へころがり込んだのでは無からうか。此所で彼は——此の若い苦學生は、漸く師を見出したのである。當時織太夫の合三味線、豐澤廣兵衛、當時野澤兵吉が即ち其れである。

金造は常に兵吉を激賞して居た。

「音のいゝのでは松葉屋廣助さんや江戸堀吉兵衛さん同等でした」と。

然し天はあくまで此の苦學生に辛く、日露戰爭直後、講和條約不滿の日比谷の燒打事件に通り合せた金造は、拔刀した巡査に後から峰打にされて其場に昏倒してしまつた。未知の學生に助けられて氣がついた時は病院の一室に寢かされて居たさうである。

人間一度死線を越へると人生に對して冷靜な考へ方が出來る。後年彼は不治の病を醫師から宣告されても決して死をおそれなかつた。多摩御陵の脇の蛙合戰で有名な橫山村散田の眞覺寺の堂に一人で斷食療法などやつて居た。

彼は金春新道の藝者屋へ出稽古に行つて僅少の金を得ながら兵吉の敎へを受けた。

兵吉が非常な酒豪で席を拔く事が多く、しば〳〵代役をした。一度などは本鄕の春木座で東京の太夫三味線を網羅した

一座が、西川伊三郎、吉田國五郎の人形で大江山の通しを演つた時保昌館の代役をしたが、恰で知らない一段をツンとテンばかりで通したさうである。

樂屋には此れを知つてゐる先輩も居たが、「花」ばかり引いて三味線は彈き手がなかつたのださうな。

彼の柔味のある纖細な彈き方は此の兵吉の影響である。

當時彼はしば〳〵岡太夫（今の新義座に居る猿糸の父）を彈き、薩摩太夫を彈き、柳適太夫を彈いて地方巡業に出た。八王子に鳶金亭と云ふ席があつた、其處へ度々出演した。

鳶金亭の娘のお梅は田舍にはめづらしい美人であつた、變骨金造も木石ではない。

女の黑髮は大象をも紡ぐ、遂に此の若い三味線彈きは斯界の榮達をよそに一人八王子の人となつた、彼が卅三歳、お梅が二十歳の明治四十三年である。

明治四十三年。

丁度其の歳は人形淨瑠璃の本城文樂では今の紋下津太夫が文太夫から師の名跡を、吉田玉治が四代目文三を襲名した年である。一たん退座した吉田多爲藏が文樂へ再勤し、女形使いの近世の名手桐竹紋十郎の死んだのも此の年である。文樂としては、人形淨瑠璃愛好者としては誠に多事多忙な年だつたのである。話は少し横道に入る。

金造の妻女お梅は蒲柳の麗人であるが、夫の死に逢つても涙一滴見せぬしつかり者だ。

私は金造の愛慾女難の方面を質問した。

「獨身の時代には隨分道樂者だつたさうですが、私といつしよになつてからは一人も其の樣な人は有りませんでしたうぬぼれの强い女とどうか笑はないで下さい」

と。私は金造の此の方面を書く事が出來ない。

彼女は女の細腕で八王子の花柳街の近くに小さい小間物店を開いた。金造は金の事を一切口にしずに晩年を安樂に義太夫の學徒として送る事の出來たのも全くこの妻女の力である。

微力な私が金造の存在を中央に紹介する必要の無かつたのも全く其の爲であつた。

當時の彼は素人の稽古をすると腕が下ると云つて非常な稽古嫌ひだつた。品川の太明樓の主人と川島樓の主人と二人の客きりしかなかつた。或る時やむを得ざる恩人の紹介で細川某と云ふ文學士の稽古をする事になつた。

此の人が非常な研究家で細川氏の質問する文章の意味が時々彼には解らない事が多かつた、習ひたいと云ふ皮肉な語り物を彼は時々知らなかつた。

當時新富町には團平、廣助兩系統の故實に精通して居る豊澤富助が來て居た。彼は意を決して紹介する人もなく獨り富助の門をたゝいた。已に岡太夫を彈き薩摩太夫を彈いてゐる相當の身分の彼が、今まで持つてゐた百段近い藝を潔く投げ捨てゝ「いろは」から演り直した。仲間からは笑はれたさう

である。

彼は初めて今までの自分の藝の曖昧なものである事を知つた、否東京の義太夫の曖昧な事を知つたのである。

彼は素人六段と云ふ將棋の天才だつた。富助が又將棋好きのヘボ將棋だつた、相手をして時々負けてやると小供の樣に喜んで其後、上機嫌で三味線の稽古をしてくれたさうである。「藝に國境なし」金造の藝は此の時から新しく誕生したものと云つていゝ。私は彼の謙讓な態度を床しく思ふ。金造五十餘年の荊棘の生涯は此の一事が萬事であつた。彼が院本に對して鋭い理解力と自信を持つて居たのは全く富助の薫陶と其の影響である。

彼はよく義太夫は「つまらなく語れ」と云つたが、丁度其の義太夫の樣な無表情のつまらない男だつた。決して人を賞めた事が無かつた、然し人に賞められたがらない男だつた。

私も亦生前彼を一度も賞めた事がなかつた。

今私は彼に大いなる負債を感ずる。今や幽明世界を異にした彼の英靈の前に最大級の讃辭を捧げ樣と思ふ。

私の貧しい經驗によれば藝人の藝評は其の私生活と藝術を混合してる事が非常に多い。

素人より正格なるべき筈の玄人の藝評が、往々其れと反對な事の有るのは多くは其の爲である、其の點金造は偉かつた。いくら親しい交遊の有る人でも決して藝風が好きでない場合は骨を指す樣に罵詈した、其の點實に信用がおけたのである。

私は全く彼に感謝しなければならない。あの難澁至難な義太夫節の、然も時代を異にした攝津、大隅の如き巨匠の面影を朧氣ながらも、其の外殼だけでも想像し得るのは全く彼のお影である。私と時代を同じくしてゐる、古靱太夫の藝風に對しても長所は長所とし、短所は短所として溺愛におちいらずして正當に觀賞して來られたのも彼の卓見に待つ所多大である。

いまどき六十一歳の玄人で古靱太夫のレコード一段を一つ一つ檢討研究する樣な謙讓眞摯な藝人が何人居るだらうか？

彼は死ぬ一週間程前、突然拙宅へ訪ねて來て食事を共にし六時間以上も藝談を戰はして歸つた。險約家の彼は私のすゝめる車を振り切つて歸ていつた。其の憔悴した後姿は今も眼に殘つて居る。だが私は滿足だ。天は冬の温い一日、ゆつくり二人を逢はせてくれたのである。今頃金造は幽明世界を異にして、彼の好きな三世團平や富助や、岡太夫とさぞ今の義太夫界を罵詈してゐる事だらう。

謹で師の冥福を祈ると同時に此の度故人に對し、並々ならぬ御好意を寄せられし、富取芳河士、安藤鶴夫、竹本都太夫の三氏及び未知の故人御最負の諸彦に、清響院樂仙金翁居士の嗣子、林英造に代り深甚の謝意を表し拙稿を終らせて頂く。

思ひ出ばなし

▼ 田中煙亭

金造師が歿くなつたさうで、哀悼の外はありません。實は昨年早く、大分わるいといふので、慰藉の催ほしでもしたら……尤もウンと貯め込んださうだから、物質的な事は要らないが……などゝ、武市さんと話した事があります。私の元の師匠は、金造師とは、故富助時代からの仲好しであつたし、富助師の追善會なども、金造さんと二人が主になつて盛大に催したのもつい近い事でした。金造さんが八王子へ引込んだのは、たしか、大震災からとおもひます。あの震災までは、私も肩衣をつけて月に一度や二度催しに出た事ではあり、その時分、主に武市さんを彈いてゐた金造さんと一座した覺えがあります。それ以上に私は、金造さんとの交際はありませんが、近年は、懇意に願つてゐる八王子の齋藤さんから、よく金造さんのお噂を伺ふ程度で、今、思ひ出といふやうなものもありません。確かな修業をした人で、その道の達人であつたのに、惜しい事をしました。

▼ 高瀬操

私は八王子にゐました時に、小澤源二（音琴）氏の紹介で金造師に逢ひましたが、今から十年以前の事であります。その頃待合『三樂』の主人三枝氏が師に就て熱心に三味線の稽古をしてゐられましたが、私は同氏所持の金造師が朱を入れた「揚屋」を寫させて貰ひました。

何しろ富助師に就て研究されただけあつて、卒直で覺え良い三味線でありました。

松尾武市氏は岐阜方面へ旅行の爲め、其後は小生病氣の爲め、御寄稿を御願ひ致して置きましたが、乍殘念遂に間に合ひませんでした。——記者——

八王子へお越しの節は

割烹　八木島家

閑靜の小間と大廣間

當座帳

……素……

▽東都五十義會　一月廿四日午後五時より大森『三芳』に於て、新年會開宴。

▽落合淑人氏　同氏經營の立野岡產園は、先月令閨永眠の爲め暫く休園の處、今回繼續開園する事になり、電話荏原三〇二四（サンハブジ）と案内狀が發せられた。

▽黑川叶氏　胃癌で帝大へ入院加療中。

▽河東碧梧桐氏　二月一日午後三時より三ノ輪の梅林寺にて一周忌を營む。

▽松本翠影氏　第〇艦隊の從軍記者として十二月渡支した同氏は、戰塵に泥みれて全く『笑ひ』から遠ふざかつてゐた皇軍各部隊を訪れて、三十餘回の慰問漫談を試み、一月十一日歸京。廿七日午後五時より電氣倶樂部にて報告漫談會を開催。

▽故竹内たもつ氏　戒名は「解脫院心外無法居士」と稱す。

▽話術倶樂部　同會新年會を一月廿二日午後五時より中根岸「鶯春亭」に開宴。

▽翠影氏從軍慰勞會　一月廿三日午後五時より池之端「一平莊」に開く。

▽藤田西湖氏　松波次郎、石川雅章氏等發企にて二月六日午後六時より研眞會本部に於て、元警視廳刑事として二十數年間大事件の檢擧に當り、一世の名刑事と謳はれた鈴木長次郎、伊東清藏兩氏の外數氏を招聘し、明治、大正、昭和に亘り、當時世人をして慄然たらしめたる幾多の犯罪檢擧の實話を聞く會を開催。

……玄……

▼鶴澤清六　狹心症の爲め目下休養

▼鶴澤文之助　三代目鶴澤亀造を襲名

▼豐澤新左エ門　風邪にて休養。

▼鶴澤寛治郎　風邪にて休養。

▼竹本南部太夫　鶴澤寛治郎、野澤勝平の三氏は、高野山に於ける故野澤喜左衛門師の碑に隣りて、梅本香伯師の碑を健立の計畫ある由。

▼竹本駒若　淺草區田島町三七番地へ轉居。

平井式強力噴霧機

本誌名譽會員平井壽樂氏は昨春より令息の事業として、肩掛噴霧機、背嚢自働噴霧機、强壓半自働同機其他平井式各種部分品の製造販賣を開業されたが、今回、高所送水用手動式ウイングポンプを改良し、更に最新技術を加へ、主要部は特殊鋼鐵を用ひ、眞鍮砲金製にして堅牢無比、疲勞絕無、能力の絕大なる頗る優秀品を製作し、此最新式噴霧機は目下果實の產地紀州、靜岡、四國、又は盛岡、北海道等其他販路擴大に亘り非常なる好評を以て迎ひられつゝあるとの由である。

前號訂正

▼前號口繪「十二年度に於ける榮冠に輝く人々」の說明中、小川都山氏三等とあるは二等の誤り、須田美義氏の二等とあるは三等の誤りにつき、玆に謹んで訂正致し兩氏に謝す。

太棹社

訃報

木下呂壽氏　肺炎にて一月十六日午後七時四十分永眠。氏は七十歳より義太夫を始め、竹本綾秀を師として酒屋、太十、宿屋先代等あり、享年八十五。

平田平和氏　氏は昨春發病、爾來靜養中の處、一月廿日再發の爲め遂に永眠。

田卷卷司氏　二月三日午前六時廿八分逝去、五日午後一時より濱町自宅にて告別式を擧行。

竹本素行師　一月八日午前五時半逝去、十四日兩國回向院にて告別式を擧行。

右謹んで哀悼の意を表す

太棹社

編輯後記

☆立春の聲を聞いて、何んとなく寒さも緩んだやうであります。

☆新春早々騷ぎ立てた若太夫問題も、香伯會の三氏下阪により、香伯氏が二代目鶴澤觀西翁の名跡襲名といふ芽出度いお土產を持ち歸られた此の三氏の德義たるや誠に美しき限りにて、義太夫界の爲め我等は感謝に堪えぬ次第であります。

☆今回の若太夫問題は幾百年後に至り、斯界にかゝる事もあつたと必ず言ひ傳へらるゝであらうが、同時に、一人香伯師に對する師弟愛のみならず、義太夫界の爲めに取行れし三氏の此の行動は又永遠に斯界の美談として殘る事でありませう

☆演劇博物館を初め、市內並に地方各圖書館、寶塚圖書室等へ毎月納本をしてゐる本誌の第九拾參號は幾百年後の斯道研究家の文獻として繙からるゝ事と、病床ふとそんな事を思ひ浮べて、何んとも言へぬ喜びを感じました。

☆今年に入つて訃報の多いこと、斯界より一人も減し去らるゝ淋しさ、何卒皆樣の御自重をお願ひ申上ます。

☆私も去月末より風邪にて、間もなく一昨年の重病のやうな症狀で發熱しましたので、遂に恐ろしく又小石川病院の厄介になり、病床に伸吟する事旬日、まだ恢復といふところへ行かず、編輯も校正も行き屆きません處は何卒幾重にも御高免を願ます。

☆近江清華氏より御見舞を賜りまして厚く御禮申上ます。

☆北仙氏、鶴澤蟻鳳氏、其他の原稿は次號にまはしました、何卒御諒承を願ます

――芳河士記――

定價

一部	金三十錢	郵稅三錢
六月分	金一圓八十錢	郵稅共
一年分	金三圓	郵稅共

廣告料

普通	一頁	金貳拾圓
特別	一頁	金參拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但三錢切手の事

第九拾參號　（毎月一回廿五日發行）

昭和十三年二月十二日印刷納本
昭和十三年二月十五日發行

東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所
電話牛込一四五一番

東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

昭和十三年二月十二日印刷納本
昭和十三年二月十五日發行（毎月一回廿五日發行）
太棹（第九拾參號）
定價 金參拾錢

前座伎舞歌

辨松店本

電銀三〇六番四〇六
話座五〇六番六〇六